

---

# 過去へ

ぼんた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去へ

### 【Nコード】

N0207Z

### 【作者名】

ぼんた

### 【あらすじ】

6代目火影うずまきナルト

第五次忍界大戦を終決させた英雄

うちはマダラを九尾との和解したことにより完全に消滅させたのだ

そして60年あまりの時間が過ぎ6代目火影つずまきナルトはこの世を去ったのだが

『どっなってんだばよ……!!』

何故かアカデミー卒業前に戻っていた

注 中傷などはご遠慮願います

## 6代目火影うずまきナルト

6代目火影うずまきナルト

歴代火影どころか歴代最強の忍びと言われている

その理由としては第五次忍界大戦による活躍によるものだろう

うちはマダラと激突

苦戦を強いられるものの戦いの最中に九尾と同調し見事にうちはマダラを完全に消滅させた

それから60年あまらの時が過ぎる

ナルトはこの時75歳

しかしその寿命はつきようとしていた

『どつちらみんなとお別れぽいってぽよ．．．．．』

『ナルト……』

ナルトの妻であるつずまきサクラ旧姓春野サクラがナルトの名前を  
呟く

サクラは始めこそサスケが好きだったのだがナルトの何事にも挫け  
ない姿勢に弾かれたのだ

『俺の出来ることはすべてやったてばね。あとはみんなに任せるっ  
てばよ』

‘九尾……悪いがこっちに一緒にきて貰うぞ’

【なにを今更……ワシが主と認めたのは6代目火影つずまきナ  
ルトだけ！！主が死ぬと言うのであればわしも死ぬわい！！！！！！】

‘悪いってばね’

『サクラちゃん。先にいつてるよ』

『結局ちゃん付けは最後まで直らなかつたわね』

サクラは泣きながらも答える

そしてそのままナルトは息を引き取った

妻のサクラ・子供達・仲間に見送られながら……

こうしてナルトは人生を終えたのだった

## 卒業試験前日

「ここは何処だ？」

ナルトは目を覚まし回りを見る

『ここって俺が前に住んでたアパート？』

回りを見渡してみたらカレンダーが目に入った

『！！！！！！！！！』

カレンダーにはアカデミーそつぎょうしけんと書かれていたのだ・・・  
・・・それも汚い字のつえひらがなで

『どっなってんだってばよ！！！！！！！！！！』

【どっやら過去に遡ってきたようだな】

『！！！！九尾？？？！！』

【どっやらナルトと共に死ぬつもりが過去に帰ってきてしまったら  
っつ】

『お前そんなことでかるんだってばよ?』

【出来るか!?!?!なぜ戻ってきたかわしにもわからん】

『うん』

ナルトは考える。ちなみに勉強は妻のサクラに火影になるときに『デスクワークの仕事もあるんだから勉強ぐらいできなさい!?!』と叩きこまれたのでかなり頭はいい。

それこそこの時代のサクラより

しかし天然ばかのところは結局直らず何かあることに怪力で殴られたのだが……

しかしいくら頭が良くなってもも前代未聞のことゆえいくら考えても分かるはずがなかった

『いま思っただけど3代目のじっちゃんやエロ仙人も生きてる?』

【まあ生きとるだろうな】

『今からなら死ぬはずの人も助けれる?』

【まあ助けれるだろうな……それよりいいのか?】



『何が？』

【時間・・・】

『・・・アア~~~~!!!!』

完全に遅刻である

慌ててナルトは着替える

しかし昔の忍服を手についた瞬間

『うわあ〜懐かしい〜』

と手が止まるが

【遅刻だぞ？】

と九尾に言われ慌てて着替えだす

『馬鹿者~~~~!!!!~~~~!!!!』

ナルトは完全に遅刻してしまいイルカにこっぴどく叱られている

『明日は卒業試験だぞ！！お前は2回も落ちてるんだぞ！！遅刻なんてしてる場合じゃないだろ！！！！』

しかしナルトは自分の時代では死んでしまっている恩師に会えたことで感激していたため話しを聞いてなかった

そのためイルカは

ビキツ？

『今から変化の術の抜き打ちテストだ！！先生そっくりに変化する事！！』  
キレた

当然ナルトに『お前のせいだぞ』とクラスメイトから言われるのがナルトの耳には入ってなかった

『次ナルト！！』  
と言われナルトは普通に印をくみ変化してしまった

『！！！！！！！！』

当然である。まだこの当時ナルトはドベである

「しまった〜!!!」  
「思ってもすでに時遅し  
イルカは驚いた顔をしている

「誤魔化さない」と、ナルトは誤魔化すことにし

「じつは昨日スゲー修行したんだってばよ!!!だから寝坊しちゃ  
ってー!!!」

というと

「そうかお前も頑張ったんだな」

と誉められた

「へへっ!!!」

と言っていると

「でも遅刻はほめられんぞ」

とくぎはさされた

家でナルトは九尾と相談していた

「これからどうすればいいと思うってば?」

【とりあえずは全力はださんほうがいいとは想うの。怪しまれるだけじゃろうし。しかしドベでいる必要はないじゃろ。手の内は隠してたとかいいわけはできるしの】

「そうだな。それと今まで使えた術は使えるってば?」

【問題あるまい。変化の術を問題なく使えたことからかんがえてな。

ただ身体能力はもとにもどっておるみたいだがの。しかし昔と違ってチャクラコントロールは完璧じゃしさほど問題あるまい。】

『わかってばよ。とりあえず寝るか』

とナルトは布団に入りタイムスリップ1日目を終えた

**卒業試験（前書き）**

試行錯誤の繰り返し

もう少し文才が欲しいです

## 卒業試験

『ふあゝよく寝た』

以前自分のいた時代では歳のせいや夜中にトイレに行きたくなるわなかなか寝付けないはでゆっくり寝れなかったのである

【今日の卒業試験はどうするつもりだ？】  
九尾が聞く

『普通に合格するつもりだってばよ。ミズキのやつはどうせ動くだろうし』【しかし何がミズキを動かす餌は必要じゃろう？】

『だったら卒業試験で影分身を出せばいいってば。そしたら禁術書のそんざいに気づくだろうし』

【まあ好きなようにするがいい。それよりまだ時間はあるがどうするのじゃ？】

『うん……演習場に行くか。いろいろ確かめたいことがあるってばよ』

そしてナルトは演習場に着くと結界をはり今まで使えた術などいろいろ試してみた。

『今まで使えた術はほとんど使えたけどまだ契約してないから口寄せだけは使えないってば』

【わしのチャクラを引き出せるか？】

『よし！久しぶりにやるってば！！！』

とはいえ不安はあった。何せ現役を退いてから5年ほどは九尾のチャクラを使ってなかったのだ。

しかしいざ使ってみると

『あれ??いままで以上に何か馴染む感じがするってば?』

【ククク・・・自分の顔を見て見るがいい】

『ふえ??』

ナルトは自分の顔を湖で見ると

『何じゃこりゃ???!』

今までは目が赤くなるだけだったのに瞳孔が開いて人外なものに変わっていた

【まさか過去へ戻ってきてフルにわしの力を使えるようになるとは  
の】

『今までの?』

【2割も使えとらんかったわい。それ以上はからだもたんかった  
しな】

『でもこの目はなんかやだってばよ』

【ククク・・・その目はなかなか便利じゃぞ?試しに自分の手を見  
てみい】

ナルトは自分の手を見ってみると

『チャクラの流れが見える?それどころかチャクラの出てる穴まで  
見える。これは点穴か?』

【そうじゃ。それにその目じゃと幻術も見破れるしの。さらにその  
状態じゃと目をつむってても気配のないクナイなどの動きまで掴め  
る。つまり完璧に360度死角はない。まあわしの目じゃからの】

『ふえ〜でもいざって時以外使用は控えたほうがよさそうだったよ』

【そうだな。まあその状態にならなくても十分強いし問題あるまい】

『よし！そろそろ行くつてばよ！！！』

『卒業試験の課題は分身の術だ！』

イルカが前で説明してるのを聞いている。

‘ここまでは前と一緒にだつてば’

【これから変えるのだろうか？】

『もちろん！！！』

そしてナルトの番が回ってくる

『よし。分身の術だ。始め！！！』

‘影分身の術’

印を素早く結んで5人の影分身を出現させる

『『なあ！！！！！』』

試験官たちは当然驚く

『『これで合格だつてばか？』』

ナルトがそう言つとイルカが

『ああ。合格だ！おめでとう！！』



と額当てをくれた  
ナルトが横目でミズキを見てみるとまるで汚いものを見るような目でナルトを見ていた

ナルトは卒業試験が終わった晩に森へ来ていた

『ミズキ先生いい加減出てくるってば』

『気付いていたのかいナルト君？イルカ先生にも気付かれなかったんだがね』

『そんなに汚いもの見るような目で見られてたら誰だって気付くってば？』

『まあいい。ナルト！！！禁術書を出してもらおうか！！！！』  
ミズキが本性出した。ナルトが無言で睨んでいると

『まあいい。殺して探すまでだ！！！！』

と背中的大型手裏剣を投げってきた。ナルトがそれをかわそうとしたらグサツ！！！！

イルカが出てきてナルトをかばっていた

『ぐっミズキ！！！！生徒になにしてんだ！！！！』

『イルカ！！！！』

『ナルト！早く逃げろ！！』

しかしナルトは心中穏やかなものではなかった

『イルカ先生が出てきたのは計算外だ！それにしてもイルカ先生を

傷つけやがって!!!

かなりお怒りのようだ。ナルト特有の口癖が消えている

『イルカが出てきたのは計算外だが一緒に始末すればすむこと。それよりナルト？少し余興を込めて話してやろう。お前がなぜ里人から憎まれているのかをな』

『!!!止めるミズキ!!!』

『お前にはな12年前に里を襲った九尾が封印されているんだよ！

!!!』

『止める!!!』

イルカは制止をかけるがミズキは止まらない

『そこにいるイルカだって本当はお前のことが憎いんだよ!!!つまりお前を殺したところで誰も悲しまない!!!』

ミズキは唾を吐きながら叫ぶ

『ミズキ違つぞ！ナルトはなあたしかなあドジだし忍術も勉強も苦手かもしれない。だがな!!!』

そこでいったん言葉を切りナルトのほうえ顔を向けニッコリ笑って言った

『ナルト？お前は誰よりも負けづ嫌いで努力家だ。この間の変化の術や今日の影分身もこの努力の賜物だろう。お前は俺の誇る優秀な生徒だ!!!』  
『そう言いきった』

『まあいい。イルカも化け狐と一緒に死ぬがいい!!!』

その瞬間もう我慢の限界とナルトがキレた

ナルトは印を結び術を発動する

『忍法 影分身の術』そう言ってその場を埋め尽くすほどの影分身を出した

『なんだと!!!』

『ナルトお前!』

ミズキは啞然と回りを見回しイルカは驚いている

『イルカ先生を傷つけた礼をさせて貰うってばよ!!!』

そして大量のナルトがミズキに遅いかかり『うぎゃ〜』という悲鳴がそこらじゅうに響き渡った

『イルカ先生大丈夫だっばか?』

ミズキをボコボコにしたあとナルトはイルカに肩をかしている。

『ああ。しかしあれはおどろいたぞ』

『へへ 俺ってば必死に修行したもんね〜』

と言いながら病院へイルカを連れて行ったのだった

**班結成（前書き）**

更新遅くなりました

## 班結成

朝ナルトはアカデミーに行く準備を終え額宛をつけた

『懐かしいってばよなんか』

【ここから全てが始まったんじゃないな】

『ああ。よし！行くってばよ！！！！』

アカデミーの教室で待っている

『なんでドベのお前がいるんだよ』

『お前今日来なくていいんだぞ？』

からかうようなことを言うやつらばかり

そんななか一人の少年を見つけた

‘サスケ……’

そううちはサスケだ

そうもといた自分の時代では激戦の末サスケの奪還に成功していた。その後サスケは暗部総隊長まで上りつめたのだが呪印を受けた影響があつたのか45歳という若さでこの世を去つたのだ。ナルトが死ぬ30年も前である。

ナルトが思考の深くに入っていると

『ちよつとそこどきなさいよ！！私はそっちにいきたいの！！！！』

サクラがいた

‘サクラちゃんメチャクチャ幼いってばよ’

と思いつながら

『はいどうぞっ』

と道をあけていた

サクラにとって以外だったらしく驚いていたが『ふんっ』ていいながらサスケのところに行った

【いいのか？】

『しょうがないってばよ。まだこの時サクラちゃんサスケのことが好きだし』

心のなかで九尾と話していると

『ようナルト』

『シカマル、チョウジ』

話しかけてきたシカマルとチョウジがいた。この二人は両親が4代目と仲がよくナルトのことを偏見の目で見る事がなかったのだ

『まあお互いめんどくせーけどがんばるか』

とシカマルが言うと

『ああ』

とナルトは笑みを浮かべながら答えた

この時、んっナルトのやつなんか雰囲気変わったか？

とシカマルはナルトの変化に気づいたがまあ気のせいだろうってことにし後ろの席に座った。

しばらくしたらイルカがきてこれからのことを説明していたのだが・・・ナルトは以前にも聞いているため寝ていた

そしたらイルカが

『ナルト？説明を聞け！！！！』

とチヨークを投げた

『ふえ？』

つと顔をナルトは上げると目の前にはチヨーク。おもわず手元にあつた鉛筆を投げてしまった。しかも風の性質変化のおまけつきで心のなかで‘あつ’と思った時はすでに時遅し。チヨークは粉々になりイルカのほうに鉛筆は飛んでいった  
なんとか紙一重でイルカは交わしたものの鉛筆は黒板を突き抜けてしまった

『なあ！！！！』

つと下忍にこれからなる8人はビククリしていた

サスケは‘こいつホントにあのドベかつ？’と思っていたしサクラは‘ナルト？？！’つと驚いていた。他の6人も同様である。ちなみにそれ以外にいた子供達ではナルトがなにをしたかも分からなかった。その為他の子供達はイルカに説明をといいだし途方にくれていたイルカは

『ナルト説明はちゃんと聞けよ』

と言つと説明に戻った

場所は変わりナルトの家

『ここがナルトの家か。話に聞いていたイメージとかなり違うな』  
つと思つていたのはカカシ  
大量の本や巻物があるのだ

ちなみにこれはナルトが影分身を使って集めたり書き写してきたりしたものだ

『ナルトのやつはカカシお前に任せる。注意していてくれ。あとうちはの生き残りのサスケもいる』

『了解』

3代目が言つとカカシが答えた

‘こりや大変なことになりそうだ’

とカカシは思うと思わずため息をついた

そしてしばらく時間がたち教室ではサスケとサクラとナルトの3人が待たされていた

『どうなつてんのよ！！他の班の先生はとっくにきてもう行ったのに！！』

と言いながらナルトの方をみた。ナルトは・・・寝ていた。

‘さっきのナルトはなんだったのかしら？’

と思いながらさっきの出来事を思い返してみた

イルカが説明を再び始めてもサクラはナルトの方を見ていた。そして黒板のほうをみる。小さな鉛筆が通った穴。どうやったらあんなことが出来るのかと考えていたため自分の名前が呼ばれていても気がつかなかった。

『7班うちはサスケ』

『ふんっ』

『春野サクラ』

『サクラちゃん？名前呼ばれたよ？』



『あつはい……』  
とサクラは答えた。サスケと同じ班になったというのに不思議とな  
んの感情も湧いてこなかった

『そしてうずまきナルト』

そしてこれにはサクラだけではなくサスケも驚いていた。

『はい』

とナルトが答えると

『サクラちゃんサスケこれからよろしくだつてばよ』

と微笑みながら答えた

それにサスケは‘こいつ俺を目の敵にしてなかったか。何の心情の  
変化だ?’と思ったしサクラに関しては思わずナルトを見惚れてし  
まった

そんなことがあつたためかサクラはナルトの笑顔を見ると何故かド  
キドキしてくるのだ

‘なんでナルトなんかみてドキドキしてるのよ。私が好きなのはサ  
スケのほず。でも……’

サクラは目を瞑り考えた

‘同じ班になるならこの気持ち確かめなきゃ  
’  
と思っっていたら

『やあ諸君こんにちは』

とカカシが教室に入ってきた

『おつそ〜い!!!』

サクラは怒鳴り

『いかなり遅刻かよ』

とサスケはこぼし

『先生きたあ？』

とナルトは起きた

そしてカカシの第一声は

『お前らの第一印象はな・・・嫌いだ』

と言い教室に暗い雰囲気は漂った

『まず自己紹介でもして貰おうかな』

場所は移りテラスみたいな所

ナルトは思っていた

『カカシ先生相変わらずだつてばよ』

【遅刻癖もな】

『しょうがねえだろ。ちゃんと理由はあるんだし』

ナルトはカカシが遅刻してくる理由を昔カカシ本人からきいて知っていた。

『自己紹介つて何を言えはいいんですか？』

手を上げてサクラは聞く

『名前と好き嫌いあとは将来の夢とか趣味とかな』

『それじゃあまず先生が自己紹介してくださいよ。右目しか見えて無くてなんか怪しいし』

『確かに怪しいしなあー』

とかナルトは思っている

『あつ俺？名前ははたけカカシっていう。好き嫌いは色々。将来の

夢って言われてもなあー趣味はお前らに教えるつもりはない』

とカカシが言うと

『結局わかったのって名前だけじゃない？』

サクラはいう

『それじゃあ次はお前らまず右端の金髪から』

『名前はうずまきナルトだってばよ。好きなものは一楽のラーメン。イルカ先生。他にも仲良くしてくれる人。嫌いなものは……』

そこでナルトは一回言葉を切る  
みんなが不思議な顔をしてナルトの顔をみるとナルトの顔が豹変してビツクリした

『仲間を大切にしないやつ。仲間や大切な人を傷つけようとするやつ。将来の夢はそんな大切な人を守ること』

これだけのことを言い切ると表情を戻した

『趣味は読書かな』

成る程ね、

カカシはあの本と巻物の山を思い出していた

一方サクラは今度は素直にナルトのことを

『かつこよかったな』

と思い始めていた。

サスケはナルトの表情を見た瞬間に鳥肌がたつて背中の中何か冷たいものが流れたのか分かった

『なんだあの表情は。寒気がした。ホントにあのドベか？』

と思い始めていた。

『次桃色の髪の子』

『はい！名前は春野サクラです。好きなものっていうか好きな人は』

『あれっ今まではサスケ君が好きだったけどいまは？』  
『っと思つていうと』

『早くしろ』

とカカシが言ったので

『っ！好き嫌いは特にありません。趣味っていつか特技は暗記です』  
つと早口で言った

カカシは

『不思議な子だな』

と思っけていて未来のことを知っけているナルトは

『あれ？前と何か違っつてば？』

と思っけています

【クククお前は相変わらさず女心理解力ゼロじゃの〜】

と九尾が言っけたのでナルトは聞き返そうとしたがサスケの自己紹介が始まるとこだっけたので止めた

『俺の名前はうちはサスケ。好き嫌いは特にない。趣味の夢っけて言葉で終わらさずつもりはないが野望はある。一族の復興とある男を殺すことだ』

つとサスケは静かに言っけた

カカシはやはりと思っけていた。サクラは以前ならかっこいいと言っけていただろっつがいまはナルトに気持ちが傾きつつあるから冷静に見えるのか

『何かサスケ君怖いよっつな寂しいよっつな』

つと思っけていた

一方ナルトは

『俺がお前の道を変えてやるっつてば。復讐なんてのは虚しさ以外何も残らない』

【それは平坦な道ではないぞ？】

『そんなのわかってるてばよ。でも前にも言っけたけど俺は一度言っけた言葉は曲げねえ。それが俺の忍道だ！！！』

と心の中でもう一度心の中で強く強く違っけていた。

そこでカカシは一回手を叩き

『よし。自己紹介は個々までだ。明日から任務をやる。』  
つとと言うとみんな顔を上げた

『まずこの4人だけで任務を行う。サバイバル演習だ』  
サクラが反論する

『何で任務がサバイバル演習なの??！いままで散々アカデミーで  
やったわよ!!』

『相手は俺だがただの演習じゃない』

『どんな演習なの?』

『ククク』

『な何が可笑しいのよ?』

『いやこれ言ったらお前ら絶対引くから』

カカシが嫌な笑みを浮かべる

『カカシ先生その笑みだけで引くって?』

【変態なだけじゃろ】

毒をはく九尾に思わずナルトは苦笑いを浮かべる

『引くわけないじゃない!そこらの人と一緒にしないで!』

『こんなとこで引くわけないじゃないしゃーなるー!!!!!!』

今のナルトは内なるサクラも見えるのかさらに苦笑い。まあ表情に  
出るのでバレバレなのだが

『卒業生27名から下忍と認められるのはわずか9名。残り18名  
はアカデミーへ戻される。脱落率66%以上の超難関テストだ』

カカシがそのことを言ったとたんサスケとサクラの顔が驚きに変わ  
る。つて言うか引いてる。サクラなど頬の辺りをヒクヒクさせてい  
た。

『ちょっと待ってよ!じゃあアカデミーの卒業試験はなんだったの  
よ!!!!!!』

そこでいままで閉ざしていた口をナルトが開く

『多分あれは下忍になれる者を選抜するための試験だったんだと想  
うんだってばよ。普通に考えて分身の術が出来ただけで忍者になれ

るっておかしいし。そうだよな！カカシ先生？』

『ああそうだ。よくきずいたな』

カカシはニツコリ笑って言ったが心の中では違うことを考えていた  
‘言動や雰囲気、新米下忍とても思えんな。少し注意しておくか’  
と心の中では警戒心が生まれ始めていた

『とりあえず詳しいことはこのプリントに書いておいたから。それ  
と朝めしはぬいてこい。吐くぞ』

といい解散した

## サバイバル演習1（前書き）

更新遅くなりました

後これからの物語を考えた上で追加の設定などありますが応援して貰えたら幸いです

## サバイバル演習 1

「やあ諸君おはよう」

「おつそ〜い!!!」

サクラが遅刻してくる力カシに怒鳴る

サスケは呆れてものが言えないようだ

(いくら理由があるってもこう何時間もまたされたらキツイよな)  
ナルトも心の中で思う

「よし。12時セットOK」

サクラとサスケは頭に??が浮かんでいる

「ここに鈴が2つある。これを昼までに俺から奪い取るのが課題だ。ちなみに鈴を取れなかったやつは昼飯ぬき。丸太に縛り付けて弁当はその前で食うから」

(朝飯食ってくるなんてのはそういうことだったのか・ね)

サクラとサスケはそう心の中で思いお腹がなり赤くなる

ちなみにナルトは朝御飯はきっちり食べてきていたりする

「鈴は一人一個でいい。そして鈴を取れなかったやつは不合格。つまり誰か一人は学校に戻ってもらうことになる。手裏剣使ってもいいぞ。俺を殺すつもりでこなければとれっこないからな」

「でも先生危ないわよ!!!」

サクラが言う

(やっぱりこの時点でわかってるわけないよな。仕方ない)

ナルトはホルダーに手をもっていきクナイを投げようとしたが

「まだ俺スタートって言っていないだろ」

一瞬でナルトの背後に回りクナイの持っている手をナルトの頭につけた



サクラとサスケは当然驚く

(うそっ・・・まったく見えなかった)

(これが上忍か)

とサクラとサスケは思っていたのだがバチバチと嫌な音がその場に響く

ナルトの持っているクナイの柄に起爆札が巻かれていたのだ

サクラとサスケは慌てて距離を取ると

ズガッーン!!!

耳をつんざくような爆発音が聞こえ目の前は煙で何も見えなくなる  
しかし力カシは爆発のすでに外にいて

「なかなか過激なことするね」

と余裕の表情をしナルトは

「これぐらいやったて上忍は死なないってばよ？」

と煙のなかから出てきた。無傷で

何故無傷でいられたのかサクラとサスケは不思議に思っていたが土遁硬化の術で体を硬化していたためである

「俺を殺すつもりできてくれるようだな。やっとお前らのことが好きになれそうだ」

そして力カシが腕を上にはげると

「それじゃ始めるぞ。よゝいスタート!!!」

サバイバル演習が始まって5分ナルトは身を隠してどういつぶつに  
でるか考えていた

(いきなり上忍レベルの術とか使ったら流石に怪しまれちゃうって  
ば？体術もある程度手を抜かないと)

【そうじゃのう。でもサクラやサスケのやつは昨日のこともあるし逆に手を抜きすぎたら怪しまれるぞ？】

(そうなんだよな)。ん？今回はカカシ先生から動くのか？この方向は・・・サクラちゃんの方へ向かってるな。確かサクラちゃんは幻術奈落見の術をかけられるはず。Dランクの幻術だし精神的にそんな深いダメージはないだろうけど・・・幻術返しぐらいしてもいいってばよね？)

ナルトはサクラやサスケにチームワークの大切さや仲間意識の大切さなど知って貰うためにもある程度のことにはムシするつもりだったがやはりいざとなるとサクラには甘かった。

そのころサクラはさっきの出来事を考えながら移動していた

(さっき見せたカカシ先生の動き。あんなのから鈴を奪えだなんて絶対無理だわ。ナルトかサスケ君と合流出来ないかし・・・は!!)

サクラのすぐ近くにカカシの姿

(せ・・・セーフ・・・)

「サクラこっち」

「えっ？」

サクラが振り返った時にはカカシは術を発動しておりサクラは幻術にかかっていた。

「えっなにが？カカシ先生は??」

「さ・・・サク・ラ・ちゃん。た助けて・・・」

「その声はナルト!!」

サクラが振り返るとそこにいたのはクナイや手裏剣が身体中に突き刺さり血塗れのナルトがいた

「ぎゅぎゅや〜!!!!!!!!!!」

「解ッ!!!!」と聞こえる声

サクラは正気に戻ると自分の首に指を当てているナルトに気がついた  
「え？・・・なんで？あんだ血塗れだったじゃない？」

「サクラちゃんカカシ先生の幻術にかかってたんだってだよ」

ここでサクラは驚く。ナルトが幻術返しが出来ること。ただもう  
一つ気になったことは

「なんであんたは私を助けたの？ほって置けば競争相手は減ったの  
に」

サクラはこの事に凄く疑問を感じた

「それやこれから一緒の班で動くんだしそれに仲間を助けるのなん  
て当たり前だつてだよ」

その言葉にサクラは思わず頬を赤く染めた。ただ一つ疑問点も出て  
きた。

「これから一緒の班で動く・・・」

「ストツプサクラちゃん。ここから先のことは自分で考えるつてば  
？」

そう言う頭を浮かべているサクラを残してナルトはその場を  
去った。

ナルトはサスケとカカシの気配の所に行く

「まあ出る杭は打たれるつて言うしな。ハハハ」

すでにサスケは埋められたあとだった

ナルトはサスケを助けるため出ようとする

「あとはお前だけだ」

とイヤパラを片手にカカシが背後の木の枝の上に立っていた

「だがまず確かめたいことがある・・・ナルトお前は何者だ？」

カカシが殺気を含めた視線をナルトに浴びせる

しかしナルトは火影にまで上り詰めたのである。その程度の殺気では動じない

「カカシ先生。何者だって俺の名前言うてるし言うてること矛盾してるってばよ」

カカシは頭をかきながら

「そういう意味じゃなくてだなあ・・・まず始める前にお前が見せた動き。どう低く見ても中忍レベル以上の動きだ。気配の消しかたなんて特にそうだ。俺は鼻が効くからお前のだいたい位地は掴めるが気配が感じられなかった。それにサクラに幻術返しをアツサリしたのもそうだし俺とサスケの位置をアツサリ押さえていたのもしかりさらには俺の殺気を浴びても微動だにしない当たり新米下忍とは到底思えない。さて質問を戻すぞ。お前は何者だ？」

カカシが身構える

ナルトは考える

(カカシ先生メツチャ怪しんでるし?どうするかなあ)

【とりあえず何か適当に言い訳するしかないの。例えばわしのことなどな】

ナルトは九尾の言葉に成る程と思いながら言葉を放つ

「カカシ先生も当然知ってるよな?俺の腹に何が封印されてるかを」  
「!!!!」

カカシ驚愕の表情を浮かべる

さらにナルトは続ける

「そういうことだってばよ。俺ってば里の人たちに嫌われてるから当然暴力や殺気を受けるのが当たり前だったんだってばよ。気配を消すのを上手くなったのは里の人達を避けるため。殺気に関しては小さいころから浴びすぎて慣れちまつたてばよ」

デタラメもいいところである。しかし流石にホントのことは言えたものではないのでカカシの出方をまつ。するとカカシは見事に信じた

「そりゃ悪いこと聞いたな」

カカシはもの凄く申し訳なさそうな顔をしている  
ナルトは心の中で

(何とか誤魔化せばよ)

とため息を吐いていた

「ナルト。しかし試験とこれは別問題だぞ？」

カカシが再び身構えると

「でも鈴を単純に奪うだけじゃ合格じゃないってばね。そもそも下忍が上忍から鈴を奪うなんて無茶もいい所だし。カカシ先生？」

カカシは再び驚愕の表情。しかしその後笑顔を浮かべ

「成る程ね。ナルトは始めからこの試験のことを分かってたわけね」  
クククとカカシが笑いだす

「でも時間はまだあるみたいだしせっかくだから俺も鈴取りするってばよ！」

カカシは以外そうな表情を見せたが

「まあお前に関してはアカデミーの成績はあまり当てにはならなさそうだし……それにけっこう興味があるのよね。よし相手してやるよ！」

そう言うとナルトとカカシは一定の距離をとった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0207z/>

---

過去へ

2011年12月18日05時47分発行